

巻頭エッセイ

作業船協会100周年を望む

藤田正一郎

川崎重工業株式会社
船舶海洋カンパニー営業本部業務部長



本稿がお盆休みの最優先課題のはずだったのに第100回を迎えた夏の高校野球テレビ観戦に例年以上に熱が入り筆が進まない。休みも終わりに近づき焦りながらもやっぱりテレビを消せずにいる。

60周年の作業船協会。夏の甲子園は第100回。作業船協会が100年目を迎える時、業界はどうなっているのだろう？と、テレビ観戦の傍らふと思う。その想像を進める前に、夏の甲子園の第60回記念大会はどうだったかを振り返ってみたい。

この年は、前年までは参議院選挙風と言うなら合区があった（島根・鳥取から1校出場のように）のに対し以後は各県1校が定着する節目の年だった。その制度変更が影響したかはわからぬが、その後40年間で高校野球の勢力図も大きく変わったと思う。

都道府県別で見ると第60回大会頃はなかなか勝利に恵まれずにいた北海道と、その3年前頃から急速に実績を挙げ始めていた沖縄が今や既に優勝旗を持ち帰り、第60回大会時点で夏の大会の唯一の未勝利都道府県だった滋賀勢が、翌第61回大会で比叡山高校が県勢初勝利を挙げた勢いでベスト8に進出して以降、頻繁に上位進出している。一方で何度も優勝の実績があったような都道府県が特に弱くなった訳でも無い。都道府県別のレベルの差はほとんど無くなっている。

学校別では第60回大会で初優勝を遂げたPL学園は長らく高校球界に君臨したがもはやその姿は無い。今や完全にPLに取って代わった大阪桐蔭は第60回の際はまだ学校が設立されていなかった。そこまで劇的な新旧交代でなくともこの第60回大会以降の高校野球界の勢力図の変転はなかなか激しい。和歌山の箕島は第60回大会こそ3回戦止まりであったが、前年の春を制し、翌年は星稜を延長

18回で破る等して春夏連覇を遂げた頃で、黄金時代だったと言える。しかし今は和歌山と言えは智弁和歌山だ。その他にここ数年～十数年で急激に一気に甲子園常連となった新興校が各地にある。

かと思うと中京や平安のように戦前からの伝統校が今も強豪であり続けている例も少なくない。そして長らく低迷していたかつての強豪校の復活事例もある。注目したいのはこれら強豪持続事例と強豪復活事例だ。ここからは勝手な想像であることご容赦願いたい。強豪持続校も復活校も、自らの過去のある時期の成功の根拠、高校野球界の競争環境の変化の実態と背景、競争力を高める方法と道具及びそれらが日々新たに生み出される状況、そして新興勢を含む競争相手からの教訓、これらを真摯に冷静に見つめ自分のものとして行く姿勢があったのだろう。学校全体としては「集中と選択」の判断が野球をその対象としてなされたこともあったかも知れない。地域別に戻るが、雪国のようなハンデを克服するのみならず、ハンデをアドバンテージに変えるような意欲も根気もあったかと思われる。

テレビ観戦からふと我に返る。川崎重工は造船業の立場で作業船協会の隊列に加えて頂いているが、造船業界はもがき続けている。当協会の他業種もそれぞれに厳しい戦いの日々と思う。苦闘の解を高校野球分析に求められるとは思っていない。ただ、第60回大会の頃もそれ以前も今も変わらず高校野球と言えは「最後まで諦めない」がキャッチフレーズだ。そして試合に敗れても前を向く。その姿勢は見る者に今年も間違いなく自らの難題に挑み続ける勇気と活力を与えてくれている。

作業船協会100周年を皆さんとともに祝いたい。